

に至って漸く弟子の聖雲が光雲の寄附金（381頁参照）と学校からの補助金によって摸刻を実現させたという。彼は種々準備の末、前年の四月に摸刻に着手し、むずかしい条件のもとで約十ヶ月かかって完成させた。その結果、彼は次のような見解に到達した。

此の吉祥天女像に於ける顔面の肉附や全體の強さは、優美と言ふよりも寧ろ高古莊嚴な感じであつて、一見是は天平時代の作品でなからうかと思はしめる程であるが、然し製作に當つて詳細に研究して見ると、此の佛像は天平の作者が作つたものではなくて、藤原時代の作家が天平を狙つて作つたものであると言ふことが明瞭になつた。

實際の製作年（建曆二年）とはまだ大分開きがあるものの、聖雲は造像技法をつぶさに研究することによって天平時代説を覆したのであつた。彩色の段階で下地師福田作太郎、蒔絵師宇佐美甚吉、仏師萩原兵助（六代目）が手伝つた。

なお、厨子扉絵の方は昭和四十九年に本学の保存技術研究室が摸写を行い、現在はそれらの摸写が浄瑠璃寺の厨子に嵌込まれている。

④ 磯矢陽の採用

磯矢陽（号、阿伎良。大正十五年漆工科卒）は昭和六年五月二十五日付で漆工科助手に採用された。左記は録音テープ「磯矢陽 一九六九年六月十三日 漆工科ゼミ」の抜粋である。

私の父方の祖父が茶人であつた影響で父の完山が本校漆工科を明治三十年に卒業、私は幼い頃から漆が生活の中にあつて、工場で職人が請け負い仕事をしている側で、炭を持って漆の仕事を見様見真似で覚えた。獨協中学卒業の時、貿易省に月給七十円で行かないかと言われたが、幼い時からの漆の匂いに引かれて美術学校へ入ろうと思つた。漆に或る理解があつたから、自然とひたむきにやるような所があつて、何の抵抗もなく、自然の環境から漆の仕事が続けたのである。

大正末期には、〔手文庫カ〕文庫の上に松の木を描いたのでは古いので、チューリップやヒヤシンスを描けば新時代のもつとされた。然もそれが金蒔絵でなく色漆でやれば油絵にも近いようなものになつた。技法は相変わらず高蒔絵や研出蒔絵でも新しい作風である。その後段々になつて、卒業した大正十五年頃には、そんなことではいけないというのでまず立体造形に目をつけ出した。しかし、立体造形といつても何を作るかとなると、結局松とヒヤシンスぐらいの違いしかないのだが、書棚よりもレコードキャビネットを作るといふ考え方になつてきた。自分たちとしては真剣に先生方に反抗を示した積りである。そして帝展にレコードキャビネットを出して落選。それでも「俺の作るものがわからないのだ」と意気揚々としていた。平面図形では構成派が流行つた。構成派とは幾何の構成で丸や幾何学模様を組合わせていく。オブジェとは違い、用途のあるもの、花活けや室内装飾が青年工芸家の中に入つてきた。自分の経験では、やってみるとすぐできてしまふように思ひ、繰り返している間につまらなくなり、また具象的なもの（古

い作品を見ながら自分自身のものを生み出していく)をやった。その頃から世の中に倦んできたような感じがしてきて、感覚的に世の中がたるんできた、行き詰まったというような気がして、構成派のあとは何が出るだろうかと自分の仕事で考えた。そして、平面では昔のもの、松や梅を自分のものとしてこなして行こうとした。立体では疑問を持ちながらも手箱や硯箱を作っていた。

卒業後の五年間は、お盆を塗ったり文庫を制作したり、父の手伝いをしていた。また、帯留に蒔絵をしたら、皆和服を着ていた頃のこと、少しずつ売れた。景気が少しは良くなって展覧会の作品もたまには売れた。その内に議事堂の仕事(壁面、扉、皇族室や演壇などの室内装飾漆塗り)が学校に委嘱された。その仕事を手伝いに来ないかと学校から言われて、六角紫水の弟子の佐藤さんと自分と二人が試作に雇われて学校の教室の一部で試作した。段々その仕事が忙しくなって学校の方の教える手が足りないから、一応見本が出来て工作順序の見当がついたから、教室の方へ行くように言われて辞令を貰ったら、東京美術学校助手を命ずる、但し向う一カ年とあった。今でいう非常勤助手ということだったが、翌年も向う一年と来て、また卒業した時と同じような手板を諸君に教えて四、五十年経った現在でもそれをやっている。

磯矢は昭和十一年に助教、同二十二年に教授となり、東京芸術大学発足後も同四十六年まで在職する。

⑤ 小堀鞆音の死去

「学校近事」(498頁)にも記されているように、昭和六年十月一日、帝國美術院会員、帝室技芸員、本校教授小堀鞆音が死去した。各紙がこれを報じるなかで、翌二日の『都新聞』は次のように伝えている。

小堀鞆音翁逝く

大和繪界の明星殞つ

絶筆となつた「山田長政」

現代大和繪界の巨星小堀鞆音翁は過般來病氣で、市外駒澤新町の自邸に引籠り去月廿一日の帝國美術院總會にも缺席療養に努めて居たが一日早朝病俄に革まり遂に午前十時逝去した。行年六十八歳である、翁は栃木縣安蘇郡旗川村の生れで、家は世々畫師であつた、明治十六年二十歳にして上京し、當時故實の大家として聞えた川崎千虎翁の車坂の塾に入り、大和繪の研究に心を潛め傍ら有職故實を研究し、盛名を馳するに至り、東京美術學校の創立さるゝや助教となり校長岡倉覺三氏の退職するや共に辭して第一期日本美術院の幹部となつた、文展が創設せられてからは、審査員として活躍し、帝國美術院の創立されるに至りその會員となつて今日に至つた、その間の傑作としては「櫻町中納言」「雄圖」「武士」「公武六曲屏風」「定朝の神技」などの大作があり、なほ晩年の大作では明治神宮繪畫館に酒井伯爵奉獻の「廢藩置縣」が此程完成した。同館の壁畫にはなほ三井家奉獻の「二條城太政官代行幸」と東京市奉獻の「東京御着輦」を畢生の事業として揮毫する意氣込みであつたが、此の二作は遂に完成に至らず、絶筆は荒木